Physical History Research Project (PHRP)
Prof. Dr. Satoshi Murayama
Kagawa University
Saiwai-machi 1-1, Takamatsu, Kagawa
760-8522 JAPAN

近代移行期に関するローカルヒストリー・アプローチ
ーマックス・プランク歴史研究所（1957-2007年）の問題提起ー

Lokalhistorisch orientierte Ansätze in der Frühneuzeitforschung am Max-Planck-Institut für Geschichte in Göttingen (1957-2007)

香川大学　村山　聡

Satoshi Murayama
Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp

はじめに

ドイツ語圏の著作において、ローカルヒストリー[1] という表現で明確な問題提起をした研究は、1997年に「旧」マックス・プランク歴史研究所の研究員であったハンス・メディックが出版したライチンゲンに関する著作であろう[2]。ハンス・メディックが所属していた研究所に「旧」を付けているのは、1957年にドイツ連邦共和国（以下、統合以前については旧西ドイツと表記）ゲッティンゲンの町に設立された同研究所[3] が、50年後の2007年3月にその終焉を迎えたからである。「歴史学」を中核とした研究所が世界から一つ消えることになった。

実は、世界の歴史研究に重要な影響を与えてきたこの研究所の軌跡、つまり、ドイツ語圏の歴史研究に止まらず、世界の歴史研究との様々な対話が、メディックの著作の帰結であるローカルヒストリー・アプローチを生み出したので

---

[1] Localhistoryという英語に対応するのは、ドイツ語ではLokalgeschichteであり、もちろん「地方史」と訳すことができる。しかし、一般に理解されている「地方史」との混乱を避けるため、ここでは、あえて「ローカルヒストリー」と表現することにした。

[2] Hans Medick, Weben und Überleben in Laichingen 1650-1900. Lokalgeschichte als allgemeine Geschichte (Veröffentlichungen des Max-Planck-Instituts für Geschichte 126). Göttingen, 1997.　この著書の元になった著作は、1992年から93年にかけて、ゲッティンゲン大学で受理された彼の教授資格論文である。その後、加筆修正がなされた後、第１版が1996年に出版され、引き続き改訂版の第2版が1997年に出版されている。一般に読むことができるのはこの第2版である。

[3] 筆者は、科学研究費の海外学術調査（基盤研究B「近代移行期における財産と所有の比較経済史研究」平成16～18年度、研究代表者：村山聡、課題番号：16402018）の支援を受けて、平成16年度から3年間、毎年2月末から3月末にかけて、客員研究員としてこの研究所に滞在する機会に恵まれた。本稿はこの研究支援の成果の一部である。

ある。そしてその研究所の終焉は、新たな歴史研究の時代の到来を予感させると同時に、歴史学研究の一つの拠点を失うということで、その研究方法の今後についての期待と不安を伴わせている。もっとも、ここで展開するローカルヒストリー・アプローチは、メディックや彼の同僚であったペーター・クリーテならびにユルゲン・シュルムボームの議論を受けて、特に近代移行期という時代状況に関して、筆者が独自に展開しているものである。また本稿では、マックス・プランク歴史研究所の功績の一部を取り扱っているに過ぎないことを前もって指摘しておきたい。

ドイツ語圏の地域史研究とローカルヒストリー・アプローチ

ドイツ語圏には独自の「地域史研究」の伝統がある。大小様々な領邦（Land）を扱った地域史研究が多くあり、地方史の雑誌や刊行物も多い[4]。「地域」という概念は常に曖昧であり、筆者は以前の著作で、地域は発見されるものであり、あらかじめ存在するものではないことを主張したことがある[5]。しかし、ドイツ語圏では通常、地域史は「ラントの歴史（領邦史）」（Landesgeschichte）と理解されてきた[6]。とりわけこの「ラント」が重要な意味を有するのは中世から近現代への移行期の歴史である。

ルドルフ・ケチュケが、1906年にライプチヒ大学に「地域史・定住学ゼミナール」（Seminar für Landesgeschichte und Siedlungskunde）を創設したのは、そのようなドイツ地域史研究を象徴する出来事であった[7]。この伝統は現在にも引き継がれ、例えば、ヘッセン地域史局（Hessisches Landesamt für geschichtliche Landeskunde）のように州単位で精力的な歴史研究の蓄積がなされている場合もある。しかし、同地域史局のように歴史の専門家がまとまって配置されている州はそれほど多くはない。他方、ドイツ民主共和国時代の東ドイツ（以下旧東ドイツと表記）では、1965年に『地域史年報』（Jahrbuch für Regionalgeschichte）が創

[4] たとえば、ライン下流のベルク地方を対象としているベルク歴史学会は1863年以来の伝統があり、現在もZeitschrift des Bergischen Geschichtsvereinsという雑誌を刊行し、2006年には100巻目が刊行されている。

[5] 村山聡『近世ヨーロッパ地域史論』（法律文化社、1990年）。

[6] 佐久間弘展・千葉徳夫・小倉欣一「ドイツの地域史研究と通史編修」（『歴史学研究』641、1993年、24～30頁）。

[7] 佐久間ほか、1993年、25頁。

刊された[8]。旧東ドイツでは、計画行政とも関連する「地域」がその研究対象となったのである。他方で旧西ドイツでは、1853年以来の伝統を引き継ぐ『ドイツ地方（地域）史誌』[9]（Blätter für deutsche Landesgeschichte）が引き続き刊行されていたが、この専門雑誌が現在もこれらの地域史ならびに地方史の専門誌として理解されている。

ドイツの地域史研究は、国家統一の遅れ、つまり長い領邦国家時代の存在、そしてまた旧東ドイツ地域にも復活された連邦制という現在の国家体制に伴う州単位での文化的アイデンティティなどにより、州を単位として研究をまとめる傾向もある。たとえば、歴史遺産に関する部局は各州に設置されており、地域の歴史遺産に関する文献は豊富に出版されている[10]。このような作品は綿密な地域調査に基づくものであり、本稿で取り上げるローカルヒストリー・アプローチと同じ傾向を有している。しかし、国家により予算建てがなされ、国家政策の一部として遂行されるそのような研究は筆者の主張するローカルヒストリーとは一線を画する。

ローカルヒストリー・アプローチと初期近世ドイツ一般史家の研究

ローカルヒストリー・アプローチによる研究が旧来の「地域史研究」と異なるのは、ある一定の地域を、全体の部分として描く事例研究ではなく、また、細分化された小さな地域の実態を具体的に示すことだけを課題とするようなものでもないからである。メディックの主張を発展させて、敢えてこれまでの地域史研究との違いを強調し、ローカルヒストリー・アプローチが目指すものを示すとすれば、分析対象の地域単位や対象の範囲を限定することによって得られる深く厚

---

[8] ドイツ民主共和国時代の地域史研究を評価するのは、本稿の目的を越えており、稿を改めて論じる必要がある。さしあたり参考にすべきなのは、Karlheinz Blaschke, Die Landesgeschichte in der DDR – ein Rückblick, in: Blätter für deutsche Landesgeschichte 126 (1990), S.243-261である。また、1980年代半ばまでについて、ドイツ語圏の社会史的な地域史研究の特徴をまとめたものとしては以下の論文をあげておく。Wolfgang Zorn, Territorium und Region in der Sozialgeschichte, in: W.Schieder u. V. Sellin (Hg.), Sozialgeschichte in Deutschland II. Göttingen, 1986, S.137-161を参照。

[9] 東西ドイツの統一後、この年報もその役割を変えてきた。たとえば、1997年の第133号からは論文掲載の様式も変更され、各州単位での地域史研究の情報交換が重要な役割となっていることが分かる。

[10] たとえば、継続的に刊行されているLandesamt für Denkmalpflege Hessen (Hrsg.), Dörfer in Hessen, Bd.1, Wiesbaden, 1997; Bd. 2, Königstein i.T., 2000; Bd.3. Königstein i.T., 2004などがあげられる。

い材料を道具として、男女差別、苦しい生活、虐待などの普遍的な問題に対して、常に新たな考察材料と気付かれなかった文脈や論点を提供することにある。

とはいえそれは、通常の歴史研究が持つ課題と変わりはない。多くの研究蓄積を踏まえて研究が進められる歴史研究において、研究史的な考察に基づき研究対象が限定されることは不可欠であるし、その上で、これまで利用されて来なかった史料や分析方法によって、新たな歴史理解が進む。この意味では、ローカルヒストリー・アプローチと言っても、通常の歴史研究との違いはない。

ただし、戦後の旧西ドイツの歴史研究特に筆者が専門とする近代移行期に関する一般の歴史研究とローカルヒストリー・アプローチとは決定的な違いがある。ここで、一般の歴史研究という表現をするのは、統合前の旧西ドイツの大学で教育を行い、さらに統合後、ドイツ全体の歴史研究を先導してきた初期近世史家たちは、時代を限定するにしてもドイツ史という講義をまとまった形で行う責務があったからである。本稿で取り上げるマックス・プランク歴史研究所の歴史家たちとは、彼らの議論が展開される土俵が異なるということである。

「初期近世」という概念は、ドイツ史研究特有の時代設定に由来している。中世末期から宗教改革期を起点に、19世紀前半までを指すことが多い。それに対して、「近代移行期」という概念は、中世から近現代への移行を問題にするという意味で、時代設定については、対象とする問題領域によって異なってくる。たとえば、手工業の歴史を語るとすれば、中世の長い時代を含みつつ、ごく最近の時代までも扱うことになるし、キリスト教の教会史についてはさらに複雑になる。中世カトリック世界の終焉から世俗化の時代が問題にされるならば、マルチン・ルターの宗教改革から19世紀初頭までが扱われ、もし、教会共同体のあり方が問われるとすれば、一つの時代設定としては、中世末期から17世紀中葉までが取り扱われる。その意味で、「初期近世」はドイツの歴史学において、大学の職における制度的な時代設定であり、「近代移行期」は、その時代設定そのものを再考する概念なのである。

戦後世代の初期近世一般史家として注目すべきなのは、ヴィンフリード・シュルツェ、ペーター・ブリックレ、そして、ハインツ・シリングであろう。彼らはすでに定年あるいは定年を迎える歳になっているが、特に後者の二人は、後の初期近世研究者にとって、無視することのできない新しい歴史理解のための道具としての概念を生み出してきた。ブリックレによるゲマイネ・マンの革命、共同体

宗教改革、特に「コミュナリズム（自治主義）[11]」、そしてシリングによる「信条化[12]」である。

いずれも旧西ドイツ特有の歴史研究の蓄積に基づき構築された概念であった。というのも、特定の時代を特徴づけるために、歴史の中で使用されている概念ではなく、歴史研究の中から理念的に抽出し、再構築した概念だからである。その主張の背景には、研究者自身の明確な問題意識がある。ブリックレの歴史叙述の背景には、中世末期から近世初期にかけて存在した共同体主義的運動へのノスタルジアが存在し、シリングには、キリスト教の多宗派共存体制の機能主義的達成におけるドイツ的展開の歴史的意義を強調することにより、ヨーロッパの中のドイツの積極的な意味を求める強いパッションが存在している。

80年代から90年代にその研究の頂点を迎えたブリックレとシリングに、奇妙な一致と相違があることも分かる。ブリックレは、意図していたかどうかはともかく、歴史家としての最後の仕事場をスイスのベルン大学に持っていたし、シリングは、東西ドイツ統一後、再構築されつつあったベルリン・フンボルト大学にその居場所を見つけた。スイスが象徴すること、そして、新たなフンボルト大学が象徴すること、それはあまりにも明白であろう。独自の自治主義を貫くスイスと新たな統合を目指すベルリン、この両者と彼らの研究スタイルには実は似たものがある。

初期近世史家であるハインツ・シリングを代表とするような歴史家によって、70年代以降、自らの教授資格論文などによって得られた研究成果を踏まえて、多くの編著が刊行され、また、80年代末以降は、新たな歴史教科書的な出版が続い

---

[11] ブリックレは、ドイツ農民戦争を巡る農民蜂起の研究に関して、英語ではCommon Manと訳されているDer Gemeine Mannの革命運動として、マルクス主義的な初期市民革命とは異なる視点を提示した。後に、Kommunalismus（共同体主義）の議論に展開した概念であり、中世から近世にかけてヨーロッパに広く存在したローカルな共同性を問題にした議論である。

[12] Konfessionalisierung（信条化）という概念はヨーロッパの特定の時代を特徴づける概念であるが、幅広い議論が展開されている。もちろん日本でも紹介されている。たとえば、永田諒一「<アウクスブルクの宗教和議>から<ヴェストファーレンの講和>へ—近世神聖ローマ帝国ドイツの法制—」、同編『近世ドイツ語圏史の課題と研究の現状』（科学研究費補助金研究報告書、2006年3月、11～47頁）を参照。

ている[13]。これは、マックス・プランク歴史研究所の三人の研究員が新たな歩みを始め、ローカルヒストリー分野での新たな研究成果を蓄積したのと同時代の現象であった。

80年代までの旧西ドイツの初期近世一般史家は、ローカルヒストリーを事例研究としたドイツ語圏の多くの歴史的素材に基づき、ドイツ語圏の時代区分あるいはヨーロッパ史の時代区分をドイツ人として描くことを目標としていた。それに対して、筆者が主張しているローカルヒストリー・アプローチは、マックス・プランク歴史研究所のスタッフたちがドイツ語圏という地域を限定せずに常にリベラルな対話の可能性を探っていたように、その到達目標が異なる。

一般史家たちは、1989年以降の新たなヨーロッパの時代に、次には国際関係史の教科書の出版を開始した[14]。個別の歴史研究から得られた素材はいかようにも表現できる。他方で、真にトランスナショナルな、しかし、新たなヨーロッパの時代が到来したちょうどその時期に、同研究所は自らの役割を終えることになった。

マックス・プランク歴史研究所の出発点と所長たち

マックス・プランク歴史研究所は、経済史を研究する者にとって重要な研究成果を提供してきた。特に、1977年に、ペーター・クリーテ、ハンス・メディック、そしてユルゲン・シュルムボームの共編著によって出版された『工業化以前の工業化—資本主義形成における農村における商品生産』（マックス・プランク

---

[13] ハインツ・シリングによる以下の一連の教科書的叙述を参照：Heinz Schilling, Aufbruch und Krise. Deutsche Geschichte von 1517 bis 1648. Berlin, 1988; Höfe und Allianzen. Deutsche Geschichte von 1648 bis 1763. Berlin, 1989; Die neue Zeit. Vom Christenheitseuropa zum Europa der Staaten, 1250 bis 1750. Berlin, 1999; Konfessionalisierung und Staatsinteressen. Internationale Beziehungen 1559 – 1660 (Handbuch der Geschichte der internationalen Beziehungen, Band 2). Paderborn, München, Wien und Zürich, 2007.

[14] ここでとりあげるのは、マインツのヨーロッパ史研究所所長であるHeinz Duchhardtを中心に1994年から企画されたHandbuch der Geschichte der Internationalen Beziehungenであり、9巻本が予定され、1997年から刊行されている。そのシリーズの最も新しい巻が、注13で紹介したハインツ・シリングによる信条化の時代を扱うHeinz Schilling, 2007である。

研究所叢書第53巻）[15] は、旧西ドイツの歴史研究においてはめずらしくマルクス主義的な歴史理解、たとえば、世界の諸民族の歴史には普遍的な法則が存在するとした、封建制から資本制社会への移行問題などを包摂した文献であった。

出版当時、ドイツ語圏の歴史研究においては、旧西ドイツの歴史家と旧東ドイツの歴史家とは明確な線引きがなされていた時代である。マルクス主義史学を標榜する旧東ドイツの歴史研究に対して、旧西ドイツの多くの歴史家たちは、戦後ドイツにおける独自の歴史理解を打ち出そうと懸命であった。もっとも旧東ドイツのマルクス主義といっても、せいぜい結論部分でマルクスの著作を引用する程度のものであったことは周知のことであろう。

マルクス主義史学ならびに一般史家には馴染みの少ない歴史人口学的な家族史研究もその視野に含め、また、ジェンダー研究など新たな社会史研究との対話を積極的に進める彼らの研究スタイルは、すでに紹介したように、旧西ドイツそして統合後のドイツの一般史家の研究スタイルとは一線を画する。本稿で敢えてマックス・プランク研究所の研究からローカルヒストリー・アプローチを抽出し、その今後の展開を展望するのは、始めに述べたように、彼らが属していたマックス・プランク歴史研究所の軌跡がその新たな歴史研究の方法の基盤を生み出して来たと考えるからである。

---

[15] Peter Kriedte, Hans Medick, Jürgen Schlumbohm, Industrialisierung vor der Industrialisierung. Gewerbliche Warenproduktion auf dem Land in der Formationsperiode des Kapitalismus (Veröffentlichungen des Max-Planck-Instituts für Geschichte 53). Göttingen, 1977. この著作は、翌年にはペーパーバックスでの出版がなされている。

マックス・プランク歴史研究所[16]は、旧西ドイツの戦後復興期に、歴史研究におけるドイツの可能性を試す実験場としての役割を与えられた。設立の主旨は、二度と戦争を繰り返さないという問題意識にあったといえる。これは1950年に設立されたマインツのヨーロッパ史研究所が、戦後まもない時期に主にフランスとドイツの歴史家の対話において、継続的なヨーロッパの協同を目指していたのと同様である[17]。ただし、マインツの研究所は、若手の研究者の支援を中心として、旧マインツ大学を活用して、同研究所内に奨学生用の宿泊施設を整え、当初より東西を問わず、ヨーロッパ中から、あるいはアメリカ合衆国などの各地から博士論文の作成を目的とした奨学生が集っていた。それに対して、マックス・プランク歴史研究所はまさに「ドイツ」の研究機関として出発したのである。

このマックス・プランク歴史研究所は、1957年7月13日に最初の所長であるヘルマン・ハインペル（Hermann Heimpel、1901生まれ1988年死亡、所長在任期間：1956-1971年）によって開所式が執り行われた。ハンス・メディックはフランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥングに2007年6月20日付けで、研究所の終焉についての記事を書いているが、その中で、ハインペルの注文になる絵画の

---

[16] 周知のように、種々のマックス・プランク研究所（Max-Planck-Institut）は、マックス・プランク協会（Max-Planck-Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaften e.V., 略号：MPG）が維持・運営するドイツの代表的学術研究機関である。マックス・プランク協会という総体の中に、2007年9月現在、80に及ぶ各専門分野の研究組織が存在している。ドイツ連邦政府及び州政府の公的資金で賄われている研究機関であるが、12,000人以上の研究員ならびに9,100人以上の博士課程学生および博士号取得研究者ならびに客員研究員などを有している。このマックス・プランク協会は戦前のカイザー・ヴィルヘルム協会の後継機関である。マックス・プランク協会が対象とする研究分野は多岐に及び、生物・医学系分野、化学・物理学・工学分野そして精神科学・社会学・人間科学分野など、ほぼすべての学術分野をカバーしている。しかし、ほぼ10年前の1990年代半ばに、マックス・プランク歴史研究所を閉鎖するというマックス・プランク協会の意向が表明された。急激な実学的学術分野の拡大に伴い、人文社会科学系分野の縮小が迫られたのである。この時は、世界中の歴史家がその閉鎖に反対署名を行い、なんとか存続がなされたが、このたびの終焉は、この本部の意向とは無縁で、むしろ、マックス・プランク歴史研究所が自らその終焉を迎えたという印象を受けてしまう。というのも、本稿で取り上げているクリーテ、メディックならびにシュルムボームは、30年に及ぶ研究員生活の後、この数年の間に相次いで退職していったからである。彼らの研究員としての生活の終焉と共にこの研究所は終焉を迎えた。

[17] マインツ・ヨーロッパ史研究所（Institut für Europäische Geschichte Mainz）については、同研究所のホームページ（http://www.ieg-mainz.de/likecms/index.php?site=site.htm&dir=&nav=129）を参照。

スケッチの説明からその話を始めている[18]。資金上の問題からモザイク画にもフレスコ画にされることもなかったのであるが、この研究所の趣旨を象徴するようなモチーフの素描であり、長くハインペルの仕事部屋に飾られていたという。

そのモチーフとなったのは13世紀末の教皇とドイツ神聖ローマ皇帝との争いの一局面であった。風切り羽が折れた鷲（＝ドイツ神聖ローマ皇帝）およびまとまりのない猛禽（＝ドイツ皇帝の同盟者）の上で、アンジュのフランス王国支配者（鋭い声で鳴く雄鶏とそのガリア人の同盟者で象徴されている）と同盟を結んだローマ教皇のクジャクが勝ち誇っている様子がそのスケッチでは描かれていた。これは中世の帝国の争いを表すものであるだけでなく、後の数百年にわたる独仏対立、特に20世紀において、1945年の第三帝国の敗北をも表すものであった。

戦後ドイツに創設されたこの歴史研究所は、絵に表された闘争の歴史を越えて、その歴史を歩み始めたのであった。メディックによれば、初代所長のハインペル自身は、ナチ期の歴史家として、1988年に死を迎えるまで自分自身の中に歴史家としての社会的貢献に関する「不和の歴史」を秘めていたという。

ハインペルの後には二人所長の体制となり、一人は中世史家のヨゼフ・フレッケンシュタイン（Josef Fleckenstein、2004年死亡、所長在任期間：1971-1984年）、そしてもう一人は、ルドルフ・フィーアハウス（Rudolf Vierhaus、1922年生まれ、所長在任期間：1971-1993年）であった。特にフィーアハウスとその同僚の研究員たちの貢献により、1977年以降、同研究所内にドイツ・フランス史研究代表団（Mission Historique Française en Allemagne）の事務室ならびに研究室が設けられ、フランス史家のロベルト・マンドリュー（Robert Mandrou、1921年生まれ）と彼の後任により、ドイツ史家とフランス史家との協同が可能となったのである。そしてその次の世代の二人の所長ハルトムート・レーマン（Hartmut Lehmann、1936年生まれ、所長在任期間：1993-2004年）、そしてオットー・G・オクスレ（Otto Gerhard Oexle、1939年生まれ、所長在任期間：1987-2004年）がこのマックス・プランク歴史研究所の最後の所長たちとなったのである。2004年から2007年までは所長不在という異常な事態が続いていた。レーマンにしてもオクスレにしても、ナチ期の歴史家ではない。戦後の動乱期に歴史研究を始めた研究者であった。しかし、彼らを教えていたのは

[18] 本稿は、ハンス・メディックの記事の原本によっている。2007年3月に同研究所に1ヶ月滞在していた際に頂いたものである。その際、この研究所と彼の関わりについても詳しく話を聞かせて頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。

ナチ期の歴史家であった[19]。

1980年代に入り、ドイツとフランスとの長年の「不和」という消え去らないテーマに止まらず、この研究所においてもより広い世界レベルでの国際交流が展開し始める。客員研究員のリストがそれを証明するが、当時の旧東ドイツからもゲッティンゲンへの訪問者があった。トランスナショナルに比較可能な歴史学の道がようやく開かれたのである。この一つの研究成果が、『工業化以前の工業化』という共編著の文献である。

『工業化以前の工業化』とその後

この研究は、1974年の秋、個別に「地域史的な事例研究」を始める前に問題点を整理しておく必要があるという認識から出発している。ハンス・メディックがこの研究所の研究員として採用されたのが1973年であり、彼は2004年に退職するまで30年間、この研究所で仕事をした。その出発点がこの仕事だったのである。所長であるルドルフ・フィーアハウスが中世史家のヨゼフ・フラッケンシュタインと共にハインペルの跡を継いだのが1971年のことであり、この研究所の新たな出発点であったことも確かである。

メディックが1939年生まれで、クリーテは1940年、そしてシュルムボームは1942年生まれである。この研究所の定年は65歳であったため、メディックが2004年、クリーテが2005年、そして2007年にシュルムボームが退職した。彼らは、共編著刊行後、個別に異なった問題設定の下に、いずれも700頁以上にもなる大部の研究を公表した[20]。そして奇しくも、クリーテによって2007年3月に発刊された

---

[19] 1999年4月27日に同研究所で行われたレーマンへのインタビューの記録がある。1998年のフランクフルトで行われたドイツ歴史家大会でコンツェやシーダーのナチ期の歴史家としての活動が鋭く問われたため、レーマンはインタビューを受け、彼は特にシーダーに教育を受けた内容を回想している（http://hsozkult.geschichte.hu-berlin.de/beitrag/intervie/lehmann.htm）。

[20] Jürgen Schlumbohm, Lebensläufe, Familie, Höfe. Die Bauern und Heuerleute des Osnabrückischen Kirchspiels Belm in proto-industrieller Zeit 1650-1860 (Veröffentlichungen des Max-Planck-Instituts für Geschichte 110). Göttingen, 1994; Medick, 1997; Peter Kriedte, Taufgesinnte und großes Kapital. Die niederrheinisch-bergischen Mennoniten und der Aufstieg des Krefelder Seidengewerbes (Mitte des 17. Jahrhunderts – 1815) (Veröffentlichungen des Max-Planck-Instituts für Geschichte 223). Göttingen, 2007.

叢書がこの研究所の最後の叢書になった[21]。この研究所では退職後も研究室が与えられたままであったため、クリーテやメディックは退職後もこの研究所で仕事を続けることができた。

さて、プロト工業化論は、アメリカ合衆国の経済史家であるフランクリン・メンデルスのフランデルンの地域史研究に関する論文から出発しており、世界中の反響を呼んだ[22]。プロト工業化論はマルクス主義史学と無縁の議論であったが、それに対してドイツ語圏で呼応したものが彼らによる共編著の文献である。先にも触れたように、旧西ドイツの歴史研究では、経済史研究者においてもマルクス主義を学ぶこともなく、まして一般史家にとって、マルクス主義は無縁であり、マルクス主義史学との接点はほとんどなかったと言ってよいが、唯一この研究所のグループだけが、旧東ドイツのみならず、広くヨーロッパさらにアメリカの経済史研究との接点を有していた。

もっともマルクス主義史学といっても多様な傾向がある。たとえば、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が本格的に取り上げられるなど[23]、マルクス・ウェーバー問題を好んで論じていた日本の経済史家あるいは社会学者の多くにとって、マルクス主義史学は馴染みが深いものであった。また、文化的マルクス主義者・新左翼主義者と理解されていたエド

---

[21] 日本の研究者においても、筆者が主張しているローカルヒストリー・アプローチに近い研究は次第に定着しつつあるようである。たとえば、Takashi Iida, Ruppiner Bauernleben 1648-1806: Sozial- und wirtschaftsgeschichtliche Untersuchungen einer ländlichen Gegend Ostelbiens aus mikrohistorischer Perspektive (angenommen zur Veröffentlichung in einer Schriftenreihe des Brandenburgischen Landeshauptarchivs)ならびに平井進『近代ドイツの農村社会と下層民』（日本経済評論社、2007年）を参照。

[22] 斎藤修「プロト工業化論：その成果と展望」（『季刊現代経済』47、1982年、121～135頁）を参照。その後の議論の展開については、Rene Leboutte, Proto-Industrialization: Recent Research and New Perspectives, Genéve: Librairie Droz S.A., 1996ならびにSheilagh C. Ogilvie and Markus Cerman (eds.), European Proto-industrialization. Cambridge University Press: Cambridge, UK, 1996を参照。

[23] Hans Medick, Die Proto-industrielle Familienwirtschaft, in: Kriedte u.a., 1977, S.90-154, hier S.112-119.

ワード・P・トムソン[24]の著作などとの学問的対話ももちろん真摯になされている。しかし、クリーテ、メディックならびにシュルムボームにとってのマルクス主義的な著作との対話は、多くの学問的傾向の中の一つに過ぎず、彼らの著作をマルクス主義的と位置づけることはできない。しかし、旧西ドイツの初期近世一般史家には無視されるか、あるいは排除されていた議論を取り込むだけの包容力が彼らにはあったということである。

さて、人口現象と経済現象との関係を統計学的に分析できるというプロト工業化論の問題提起以降、経済史研究の分野で本格的な論争を巻き起こした[25]。しかし、この人口と経済の相互関係に関する法則的な議論は収斂することはなく、一つのまとまった成果には達しなかった。また、マルクス主義史学をもその議論の射程に組み込んだのは彼らの共編著に止まった。クリーテの2007年の著作のタイトルには、「巨大資本」という概念が残っているし、メディックの著作でも「資本」という概念は使われている。しかし、マルクス主義史学的な歴史理解を彼らの研究の中でどのように位置づけるかとなると、この三人の中でも一様ではない。

というのも、1974年当初より、この研究グループにはいくつかの歴史研究の潮流が影響を与えていたからである。主なものを挙げるとすると、現代社会史に関するハイデルベルクの研究グループ、ゲッティンゲンの社会経済史研究所のグループ、ミュンスターの社会経済史研究所のグループ、そして、人口および社会構造の歴史に関するケンブリッジグループであった。彼ら三人にはそれぞれ異なった研究方法が影響を与えており、その結果、マルクス主義史学との関係も異なっていたのである。

またローカルヒストリー・アプローチとの関係となると、この共編著の冒頭の「地域史的な事例研究」という表現に見られるように、地域史（Regionalgeschichte）という表現がこの時期にはまだ使われている。しかし、後のメディックの著作では、ローカルヒストリー（Lokalgeschichte）という表現が方法的にも確立されて使用される。当初は、マルクス主義史学に代表されるような普遍的な現象に対する「事例研究」という発想が残っていたのである。表現を変えれば、一定の空間的分割が前提とされる「地域」研究とも「ローカルヒスト

---

[24] Edward P. Thompson, The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century. Pp. 76-136 in: Past and Present 50, 1971; E.P.Thompson, Zeit, Arbeitsdisziplin und Industriekapitalismus, in: Gesellschaft in der industriellen Revolution. Hg. Von R.Braun, W.Fisher u.a. Köln 1974, S.81-112.

[25] 友部謙一『前工業化期日本の農家経済―主体均衡と市場経済―』（有斐閣、2007年）、特に163～188頁を参照。

リー・アプローチ」は異なる。このことが明確になるには、その後、30年以上の歳月を必要とした。

特にメディックの著作は、クリーテやシュルムボームの著作とは一線を画する。いずれも大部の著作であるが、クリーテの場合は、最後にまとめを記しているし、シュルムボームの場合も、「まとめの代わり」にとは題しているが、全体のまとめに対応した叙述を行っている。しかし、メディクの場合は、最終章の第７章は追伸（Postscriptum）とされ、19世紀初頭の飢餓に関する手書き文書のねつ造の話が紹介されている。さらにその後には、史料批判的な補説が全部で38頁、5編ある。メディックの著作は、ある意味で完結しなかったのである。

メディックは、ローカルヒストリー・アプローチの方法問題に関して、最も洗練された議論を序論で展開している。メディックは、人間行動の日常における歴史的な特質や個性を、可能な限り多様かつ正確に明らかにするミクロヒストリーは、歴史的な知識の場所化（Lokalisierung）と文脈化（Kontextualisierung）を可能にすることになり、文化、社会、人口あるいは政治的な契機、経過、出来事の瞬間における同時性と異時性を明らかにできるとしている[26]。しかし彼の詳細な研究も「ミクロヒストリー」の枠組みだけでは、実は完結していなかったのである。ここでは、この方法の延長線上にローカルヒストリー・アプローチを新たに位置づけておきたい[27]。

ところで、プロト工業化論は、典型的な数量経済史であり、数理モデル的な議論を展開してきた。多くの数値が使われるだけに、時代を遡れば遡るほど、史料から得られたデータの数量的意味と史料的信憑性が問われることになる。また、数量データの与えられない時代は研究対象からはずれる。メディックが著作の一部を割いて、この史料論を展開していたのには理由があったのである。彼の著作における第７章あるいは補論は、それぞれさらに展開が可能な独自の歴史研究と評価できる。実際、その後、マックス・プランク歴史研究所の最後のプロジェクトとなるエルフルト大学との共同で行なわれたメディックの研究プロジェクト[28]は、その限界を超える試みでもあった。

ハンス・クラフト（1584-1665年）という一手工業者による30年戦争時の年代

---

[26] Medick, 1997, S.29.

[27] 彼の著作の副題には、「一般史としての地方史」（Lokalgeschichte als Allgemeine Geschichte）とあり、ミクロヒストリーの方法とは一線を画していると考えてよいのではと思う。

[28] Mitteldeutsche Selbstzeugnisse aus der Zeit des Dreißigjährigen Krieges (http://ub.uni-erfurt.de/mdsz/index.htm) を参照。

記に関する研究プロジェクトは、詳細な統計分析の可能な時代とそれ以前の時代とを橋渡ししようとする一つの試みであった。もっとも、一つの年代記でそのような困難な課題を克服できるわけではないが、筆者が主張している歴史研究におけるもう一つの分析可能性を示唆するものであった。つまり、歴史研究はこれまで常に歴史資料の解読と分析を行ってきたが、歴史資料の存在そのものが歴史研究の対象となりうるという視点は十分に展開されてこなかったのである。つまり、史料の信憑性を問うという史料批判的な意味を超えて、史料の存在そのものを議論することにより、史料から得られた内容を分析する道とは異なるもう一つの歴史研究あるいは比較研究の道が存在することが示唆された[29]。

メディックとほぼ同時に、オリジナルなモノグラフを最初に公表したのはシュルムボームであった。歴史人口学研究あるいは家族史研究が一定の到達点に達し、新たな時代の到来が模索されようとしていた時であるだけに、彼が利用できる方法的理解の前提はほぼ出揃っていた。彼の著作が出版されたのは、日本で速水融を中心に、人文・社会科学系ではこれまで考えられなかったような巨大な研究プロジェクト（通称：ユーラシアプロジェクト）が開始された1994年であった[30]。家族史研究もようやく歴史研究の一つとして定着し、歴史人口学研究においても、イギリスのケンブリッジグループがそのグループの結成から33年を経た1997年に、研究の集大成である著作[31]を公刊する直前であった。

人口現象は、出産、結婚、死亡、そして移動という主要な要因から観察されるが、その要因のすべてについて、家族のあり方が深く関わっている。しかし、家族史研究と歴史人口学研究との対話はほとんどなされることがなかった。ユーラシアプロジェクトはこの両者の橋渡しを目指し、国際比較を行おうとするものであった。シュルムボームはこの研究プロジェクトの出発時点において、家族史研究と歴史人口学的研究との一つの接合点を提示することになった。しかし、

---

[29] 筆者はこの発想の下に、新たな研究プロジェクトを展開している。科学研究費の基盤研究A：「近代移行期における地域情報とその蓄積過程に関する比較制度研究」（平成19年度から4年間の予定、研究代表者：村山聡、課題番号：19203018）。本稿はこの研究成果の一部でもある。

[30] 文部省科学研究費創成的基礎研究「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」（平成７～11年度、研究代表者：速水融）であり、この最終実績報告書は、2000（平成12）年4月15日に公表されている。筆者もこの研究プロジェクトのメンバーであった。

[31] Edward A. Wrigley, R.S.Davies, J.E.Oeppen and Roger Schofield, English Population History from Family Reconstitution, 1580-1837, Cambridge University Press: Cambridge, 1997.

オーソドックスな歴史人口学的統計分析を基調に置きながらも、彼の研究の重心は歴史人口学的なメカニズムの解明にはなかった。

シュルムボームの場合には、ミクロヒストリーあるいは歴史学的なマイクロスタディ[32]の研究成果に基づくマクロヒストリーとの対話の効力にその研究の重心が置かれた。彼自身、この時点では、彼の研究をローカルな事例研究と位置づけていた点においても[33]、ローカルヒストリー・アプローチの持つ問題析出的効果については、必ずしも十分な自覚はなかった。ただし、オーソドックスなプロト工業化論で展開された、人口と経済との相関に関する構造・機能主義的なモデル理解[34]をマクロヒストリーと呼ぶならば、彼が問題にしたのは、固定されたかに見える社会経済システムや法制度上においても、多様な民衆の選択と行動の可能性があった点である。独自の目的と可能性を有した民衆の行動を、可能な限り明らかにしようとした論考であった。この著作で明らかにされたことは、一方では、前近代社会における社会的不平等の根の深さの確認である。しかし他方で民衆は、経済人口学的な諸条件の従属者ではなく、婚姻にしても相続にしても、選択可能性を最大限活かす能動的な側面が観察された。

シュルムボームは、一連の家族史研究の後、ゲッティンゲン大学において1751年に設立された産院に関して、医師の治療日誌や患者の診断書などドイツ語圏では希有の体系的な記録に基づき、啓蒙期の医療の社会史に取り組み始めた[35]。フランスの社会史家との対話を重ねて来たシュルムボームのこの研究方法も、一つの村や町を扱うものではなくとも、対象とする場所を一つの産院に限定しているという点で一つのローカルヒストリー・アプローチと考える。そこで中心となる論点は、統計的な分析も含めた科学的で体系的な資料に基づく実学的医療の展開

---

32 村山聡「マイクロスタディはドイツ研究に何をもたらすか」（『ドイツ研究』39、2005年、36〜51頁）。

33 Schlumbohm, 1994, S.19.

34 斎藤修『プロト工業化の時代―西欧と日本の比較史』（日本評論社、1985年）では、その経済人口学的メカニズムに関する理解を明瞭に整理している（同書、93〜115頁）。

35 Jürgen Schlumbohm, Constructing Individuality: Childhood Memories in Late Eighteenth-Century Empirical Psychology and Autobiography. Pp. 29-42 in: German History. The Journal of German History Society, 16-1, 1998を参照。彼は新たな著書を準備している。2007年11月8日に開催されたチェコ共和国、東ボヘミア大学での講演の際に、シュルムボームが利用している希有な史料の存在意味と彼の主張の接点に関する筆者の質問に対して、彼もこの点については、今後の課題として考えるべきことを述べている。

と、民衆の意識の変化や啓蒙主義時代の政府の対応との相互関係にある[36]。

さて、メディックやシュルムボームと異なり、クリーテは、よりマルクス主義史学の傾向を有していた。彼は、最初の三人の共編著刊行の2年後に、16世紀から18世紀末葉にかけてのヨーロッパ経済史の基本線についての教科書的な著作を書いている[37]。『後期封建制と商業資本』と題されたこの著作は、オリジナルなモノグラフというよりは、先の共編著と同様に、当時利用し得た文献をほぼ網羅する形で、数量経済史的な指向性の上に、前近代の移行期の特徴を明らかにしたものであった。この著作は、経済的基盤が社会を決定するというマルクス主義史学的なマクロヒストリー的文献と位置づけることができる。一度はこのような資料整理も必要であった。それから20年の歳月を費やして、2007年に出版された著作でも、日本の経済史研究者にとっては定型的であったマルクスやウェーバーの議論が研究の課題設定において重視されている[38]。

しかし、メンノー派という宗教的な周縁集団によって、クレフェルトに生み出された絹織物産業の発展に関する詳細な彼の叙述は、仮説の検証というモデル分析的な実証研究とは異なり、見えざる物を探すスタイルを有している。封建制から資本制への移行問題は、もはや普遍的な法則としてのマクロ経済史的あるいは社会史的な展開の中では理解されてはいない。メンノー派の巨大資本、それは具体的にはフォン・デア・ライーエン家、特にフリードリッヒ&ハインリッヒ・フォン・デア・ライーエン会社は、領主国家との協同において、クレフェルトの絹織物産業の発展を維持することになったことが強調される。巨大資本の独占もしくは寡占状態は、住民の経済的自由を制約していると同時に経済的な安定を保証しているものであった。

しかし、このような協同はナポレオン支配と共に終焉を迎える。クリーテは800頁にも及ぶ著作の最後で、メンノー派の巨大資本は旧体制社会と結びついていたものの、その後クレフェルトとその周辺地域が経済的自由主義の時代においても即座に柔軟に対応できたのは、メンノー派の社会的遺産がその歴史的影響力

---

36 シェイラ・オジルビーによるヴュルテンベルク地方に関する著作は、この点十分な配慮がなされている。Sheilagh Ogilvie, State Corporatism and Proto-Industry: The Württemberg Black Forest 1590-1797. Cambridge, 1997を参照。この著作はこの時点ですでにローカルヒストリーと旧来の領域的な行政を問題にしうる地域史研究との接合可能性を示していた。

37 Peter Kriedte, Spätfeudalismus und Handelskapital. Grundlinien der europäischen Wirtschaftsgeschichte vom 16. bis zum Ausgang des 18. Jahrhunderts. Göttingen, 1980.

38 Kriedte, 2007, S.1-46 u. S.472-512.

を失うことがなかったからであると締めくくっている[39]。商業資本か産業資本かというような単純な線引きでは説明できない、隠された歴史的動態というメンノー派の社会的遺産を抽出できたのは、ローカルヒストリー・アプローチの特徴である。また、前近代国家の役割を明らかにしたクリーテの著作は、心理学的あるいは行動科学的傾向の強いミクロヒストリー・アプローチとは異なり、国家形成や行政の歴史的役割を具体的な場所において問題にできるのがローカルヒストリー・アプローチの特徴であることも示していた。

もともと1977年に出版された三人の著作は、「プロト工業化」に関する膨大な文献調査と研究史的な整理を優先していた。この著作では理論的な考察が中心に展開されていただけでなく、日本の経済史研究に重要な影響を与えてきた大塚久雄の議論との接点もあっただけに、クリーテたちの議論は特に日本でも注目された[40]。

しかし、農村工業の発展と家族構造の変化、そして人口現象との相互関係の議論において、初期段階に主張されたような人口学的なメカニズムに関するモデル理解は容赦なく批判されることになる。詳細なローカルヒストリー研究によって、モデル論的歴史理解の限界が明らかにされた。また、農村工業の進展による封建制の崩壊というような議論も一般化できないことが明らかとなった。

つまり、産業革命以前の工業化過程に関して、この30年間に及ぶ議論で最終的に問題にされたのは「工業化」の過程そのものではなく、何を「経済発展」の核心として観察するかにあった。あるいは、原則としてローカルな社会で生きる人間の福利について、現代社会のメカニズムから議論を展開するのではなく、ある一定の時空間において決定的な影響を及ぼす要因は何か、また諸要因を変動させるメカニズムは何か、というような論点の発見の方がより注目されることになったのである[41]。

おわりに

メディックによれば、共編著刊行後には、一時、三人が共に文書館で仕事をした時代もあったが、彼らの間においても、激しい議論の対立があった。また、マルクス主義史学も包摂するという旧西ドイツの歴史学界では極めて例外的な研究に対して、当時のこの研究所の所長であったルドルフ・フィーアハウスは若い

---

[39] Kriedte, 2007, S.712.

[40] 柳沢治「西ドイツにおけるProto-Industrialization論とその問題点」（『土地制度史学』92、1981年、66〜71頁）を参照。

[41] たとえば、Ogilvie and Cerman, 1996, pp. 229-230を参照。

彼らに対して徹底して批判的であったという。しかし、メディックはその時期がこの研究所の頂点の時代だったと述懐している。フィーアハウスは最終的には彼らの学問活動の意義を認めたという。

様々なマクロヒストリーの伝統との対話を重ねつつ、ドイツ人であり、ドイツで教育を受け、常にドイツ語圏のみを研究対象とした研究者であっても、ドイツ語圏あるいはドイツという基盤と一定の距離を保ちつつ研究を推進してきたのが、クリーテ、メディックそしてシュルムボームであった。より具体的な特定の時空間に議論を集中させることにより、新たな普遍的な枠組みあるいは見過ごされがちな論点を発見することがローカルヒストリー・アプローチによる研究作業の神髄である。彼らが端緒を切り開き、その方向性が明らかとなったローカルヒストリー・アプローチが、近代移行期については、もし、史料存在の分析により国家や国家間の枠組みをも視野に入れることができるならば、ドイツで蓄積されてきた伝統的な地域史研究を広く世界に解放する可能性もあり、また、多くの事例の断片を集め再構築する一般史研究との対話の可能性も出てくる。というのも、本稿では十分に議論ができなかったが、近代移行期は次第に統計的な資料が登場する歴史資料の一大転換点だったからである[42]。

ゲッティンゲンの旧歴史研究所の同地には、その建物を引き継ぎ、同研究所よりもさらにヨーロッパを越えてトランスナショナルな志向性を有する新しい人文社会科学系のマックス・プランク研究所[43]が整備されていく。ここで取り上げたローカルヒストリー・アプローチは、その新たな場所を舞台に、さらに飛躍的な一歩が踏み出されることを切に望む。

---

[42] 村山　聡「ヨーロッパにおける主従関係と住民把握の論理」（笠谷和比古編『公家と武家－官僚制と封建制の比較文明史的研究』思文閣出版、近刊）。

[43] 新たに設立されたのは、Max-Planck-Institut zur Erforschung multireligiöser und multiethnischer Gesellschaften (=Max Planck Institute for the Study of Religious and Ethnic Diversity)である。